「心のバリアフリー　住民参加のまちづくりー母子家庭の視点からー」

今、様々な所でバリアフリーという言葉を耳にする。道路をはじめ、建物、交通機関、家の設計にもバリアフリーを取り入れ障害をもつ人、お年寄りに配慮のある環境が整備されつつある。不自由・不便を感じる社会生活を転換するためのまちづくり計画は身近なところで少しずつではあるが形となって見えつつある。「目にみえるバリアフリー」である。

「目にみえるバリアフリー」は利用する人にとって、どのような「心のバリアフリー」の役割を果たしているのだろうか。

我が家は「母子家庭」である。現在子供２人を育てている。生きていくこと、「まち」で暮らしていくことは想像以上に大変である。毎日必死である。その「必死」の視点から「やさしさあるまちづくり」をみつめてみた。

まず、私たちにとって「心のバリアフリー」が一番掛けている。障害をもつ人、お年寄り、生活に不便を感じる人、すべてにとって言えることだろう。では、私たちはどんなまちであれば自分のまちに「夢」や「誇り」や「楽しさ」をみいだせるのか？

●自身の日常経験をヒントに考え出せるもの

↓

●提案【お金をかけないまちづくり】・・・経済的理由を少しでも克服したいという力は逆に活力になる。ｱｲﾃﾞｱを沸きたたせてくれる＝母子家庭生活はｱｲﾃﾞｱの連続生活である

１．「ひとり親家庭」の現実・・・「親子で旅行に行ったことがない」

①「道の駅」　住民参加（ＰＩ）の導入による地域活性

我が町には「道の駅さがのせき」が存在する。過疎化の進むこの町で、「道の駅さがのせき」の存在は地域の産業や文化の集大成させた場所を感じさせる施設であってほしい。道の駅を地域の活性・観光として成功させている町や村も多々存在している中、残念ながら今のところ「道の駅さがのせき」は「ﾄｲﾚ休憩」として利用されているだけだ。建物の中では食事できるｽﾍﾟｰｽ、特産品・みやげものも置いてある。外には海が広がり、展望台、小さなﾌﾞﾗﾝｺがある。なのに、誰もそこで食事をしていない、みやげものも売れている気配がない、ﾌﾞﾗﾝｺで遊ぶ人がいない。せっかく足を運んでくれた観光客にこのまちの良さを少しでも伝えようという意志や意気込みが感じられない。潜在力は十分あるはずだ。引き出そうとしていないだけかもしれない。

「道の駅」が「素敵な場所」に変身すれば、私たちにとって「小旅行」に変身する。

「特産品半額ｻｰﾋﾞｽ」的なｻｰﾋﾞｽ面もあれば小旅行に足を運びやすく、また休日など観光客が利用しそうな日に地元のお年寄りの作った果物、野菜を並べる。過疎化を悩むと同時に住民やお年寄りが元気になり活き活きと過ごせる方法も同じく考えるべきだ。

元気な子供の遊ぶ姿をもっとみたい。「小水族館」はどうだろう。大水族館よりもっと間近に自然を感じてほしい。ここは市内から１時間とかからない。「道の駅」に「遊び」にきてほしい。ここで子供達に魚にふれてほしい。大きな水槽をぐるぐる廻る、大きな魚たちよりもっと子供たちには活き活きとみえるはずだ。小さな水槽でもよい、子供たちは小さな生き物達に気軽にあえる。「ﾌﾘｰﾏｰｹｯﾄ」などはどうだろう。道の駅の一角をそういう空間に年に何度か変えてみる。

無の空間を楽（たのしみ）の空間にする努力。今は残念ながら「無の空間」。

大人もそこで海をみて「うっとり」できる空間。自分のまちを誇れる「まちづくり」はそんなところから始まるのではないか？我が町の「道の駅」は住民が参加して楽しく、人がもう一度気軽に遊びに行きたいと思える場所にする事、存在の変身で、立派に活性化する可能性を秘めている。

可能性があるからこそ「あそこはもったいない」と声が出るのだ。

過疎や財政難を嘆く前に今ここに居る住民が元気に輝ける町になるかに重点をおく、既存の施設を死なせず住民が誇れれば人は流れる、立ち止まる。「無」から色々と知恵をしぼり生み出す力がこの不況時には絶対的に必要だと私は思う。「新」ではない。「無」を「有」にするのだ。それは自分の身の回り、会社の中、知恵を絞ればたくさんある。不況だからこそ。逆境だからこそ。

２．本当の優しさ・・・窓口業務

私たちは「母子家庭」であるがゆえに「役所」に行く用事の多い。曜日はもちろん、平日の月曜～金曜。銀行もそうだ、窓口と言われるところは「私たちと同じ動き」なのだ。　病院窓口も日曜は開いてない。子供が熱を出した時、救急のドアをたたくべきか否か。大概は月曜に仕事に支障をきたしながら病院に行く。公営住宅の抽選日もそうだ。抽選日はいつも平日。土日に「窓口」業務を行うこと、「優しいまち」のひとつではないだろうか？それだけで私たちにとっては「とても優しい」。**公に務める人たちへの私の心の声はいつか届くだろうか。公に務める人たちの「月曜～金曜の間にお越しください」という文句はいつの日か消えて「都合の悪い方は土日でも受け付けています」になっていてほしい。「やさしいまちづくり」とはそんなところからである。**

３．このまちに住めることに幸せを感じたい・・・住民も変わる努力

今、子供たちが通う小学校での取り組みの中に「地域ｸﾘｰﾝｱｯﾌﾟ作戦」というものがある。定期的に地域をきれいにする。海をきれいにする。環境を考えるというものだが、子供たちがｺﾞﾐ拾いを始めると地域のお年寄りたちが自然と手伝いに出てくる。子供の意識は格段に変わった。たばこの吸い殻を普段から拾う。意識がみるみる違ってきた。子供達がきれいに掃除した私たち地域の財産「海」に大人がどこからかｺﾞﾐを捨てていく。夏場は若者が花火する。楽しく騒いだその燃えがらを地域の子供が片づける。矛盾・悪循環であることまでも子供達は知っている。でも、きれいな海でありつづけることを願い、ｺﾞﾐを拾う。**「まちの変化」を願う**からである。

きれいな建物、整備された住宅地、本当の意味での「まちづくり」はそんなところにはないかもしれない。点字ブロックのある歩道に自転車をおかない「心」の中に本当の意味での住み良いまちづくり、心のバリアフリーがある。

地域の活性に私たち「母子家庭」も参加できる、その機会をたくさん作っていただきたい。それが「まちづくり」に参加するというﾌｨｰﾙﾄﾞに立てる歓びを生むことにつながっていくと切に思う。PI、住民参加型のまちづくりと盛んに行われているが現実は限られた人たちの代表に与えられた発言、参加の場のように感じる。幅広い生の声を活かした「まちづくり」、心のバリアフリーを活かせる「まちづくり」こそが財政難である現在、絶好のﾁｬﾝｽだと思う。情報公開から情報共有へ。私たちがまちづくりに参加できる機会をたくさん設けてほしい。

ﾜｰﾙﾄﾞｶｯﾌﾟｶﾒﾙｰﾝ選手団をもてなした中津江村の村民は「心」でもてなした。小さな村の弱点、無というものが今は立派に国際交流へとつながる「村の宝」を村民自身の心が作ったのだ。

「意識が変わること」当たり前すぎてなかなかできないが実はそこにいくらでもヒントが隠されているような気がしてならない。知らないうちに「まちづくり」が行われてしまっては困る。

広く多くの人々の参加できる機会・広報（IT の活用）が必要である。ｱｲﾃﾞｱは無限なのだ。

よい「まちづくり」は弱者が満足できて初めて「よいまちづくり」である。